院長ブログ
director's blog

～3.11に想う～　継続は力なり

森安　章人 Akihito Moriyasu

今年で東日本大震災10年目となる。前任地石巻の津波の中で見た光景はいまだに脳裏を離れることが無い。

震災経験は大変なものであったが、誰しもが経験できないものであり、それゆえ少しでも役立てたいと考え歩んできた。

医局時代の阪神・淡路大震災、そして東日本大震災。

人生で大震災は2回で十分なのだが、「今度は奈良で南海トラフか」なのである。

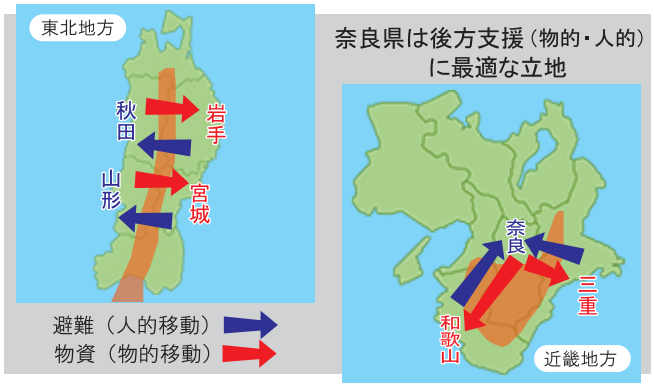
863年 越中越後地震（新潟）	2004年 新潟県中越地震（M6.8）
868年 播磨・山城地震（山崎断層 M7.0）	1995年 阪神・淡路大震災（M7.3）
869年 貞観津波（東北 M8.6 以上）	2011年 東日本大震災（M9.0）
887年 仁和津波（東南海地震 M8.5）	？年 東南海地震・津波（南海トラフ）

1 3回目の可能性『歴史は繰り返される』

右上の図は、過去の大震災を発生場所で整理したものである。2004年に新潟中越地震（M6.8）、その9年前に阪神・淡路大震災（M7.3）、中越から7年後が東日本大震災（M9.0）。歴史を1200年ほど遡り、平安初期の869年にM8.6以上の貞観津波が東北地方で起こり、その前年に兵庫県の山崎断層が動いた播磨・山城地震（M7.0）、その5年前が越中越後地震と短期間に近年に類似した大地震が起こっている。

これだけなら、偶然の一致を笑い飛ばせる。しかし、その後があった。東北地方で大きな被害を出した貞観津波の約20年後にM8.5の東南海地震「仁和津波」が起こっているのだ。この計算からするとあと約10年で南海トラフが起こる事になる。そうあっては欲しくないが“歴史は繰り返される”。関西に住む者として肝に銘じなければならない。

2 奈良県に求められるもの『最前線・後方支援の立地』



盆地には直接津波は来ない（はず）。その奈良県の立地から何を求められ、何ができるであろうか。

東日本大震災では太平洋沿岸が壊滅し、南北の物資ルートも途絶えたため、奥羽山脈を越える日本海側からのルートが選択された。山形、秋田への大量避難・日本海側への人的移動、逆に新潟経由での物資供給・日本海側からの物的移動である。

同じように南海トラフでは和歌山、三重の沿岸地帯からの避難・人的移動と沿岸地域への物資供給を、紀伊半島の中央部を拠点とすれば最も簡便であることは容易に想像できる。南部を山に囲まれ紀伊半島の中央に位置する奈良県は、物資供給の中継地点・最前線基地とならざるを得ない。奈良県は最前線・後方支援に最適の立地条件なのである。

さらに沿岸地域からの大量の避難者の受入れも求められるであろう。宮城県内の高齢者施設が秋田県内へ「丸ごと移転」も実際多数行われた。高齢者収容は、枠を超えてでも受入れねばならない事態を想定する必要がある。

3 “備えよ常に”『継続は力なり』

ボーイ・スカウトのモットー“備えよ常に（Be prepared）”は有名である。その一方で、いつ起こるかわからない災害にどう備えればいいのか？答えに窮する。

石巻でも5年以内に100％起こるとされた宮城県沖地震に備えを講じたが、思い起こすと想定外の津波で壊滅された病院に役立つものはなかった。しかし、唯一震災2年前から毎月ずっと続けてきた災害訓練だけは役立った。震災時パニックに陥らず、医療のプロとして冷静な行動に結びつけられた。

奈良に来て2年目から、当院でも災害対策委員会を立ち上げ、地震災害訓練を月3回（10日、20日、30日）実施している。火災訓練と違い、同時多発的で無傷の部署はなく、他所を助ける余力などない。各部署が自分で考え、自ら行動する以外にない。全職員が各部署での「行動表」を基に、あらゆる場面を想定して、真面目に繰り返し訓練に取組んでいる。最近では成果もあがり、まさに「継続は力なり」である。

何事もコツコツ積み重ねることが大切、「継続は力なり」私の座右の銘である。

こんな訓練が実際に役立つ日など来ないに越したことはないのだが。

地震災害訓練の様子